



学校だより

自主・自律

第15号

令和8年1月15日
大東市立大東中学校
校長 長谷 敦

1995年1月17日の記憶

今年は阪神・淡路大震災から31年たちます。もう31年かと思いながら、今年もあの日に起きた震災の記憶を伝えます。生まれる前の話だという先生も多くなった中、関西に生まれ育ち、震災を実際に見た自分たちの世代が、あの日のこと・思いを伝えていく必要があると思っています。



あの日の朝を今でもはっきり覚えています。午前5時46分、そろそろ起きようかと思っていた時間でした。恐ろしい音に起こされました。生まれて初めて聞く「ゴォー」という恐ろしく低い音。そして、その音が近づいてくるのです。あの時の怖さを忘れることができません。後になって地震の前の「地鳴り」だと知りましたが、本当に地面が吠えるのです。恐ろしい音が地底から湧き上がってくるのです。

「何の音だろう」と思っている矢先に、今度は強烈な縦揺れが始まりました。地面から突き上げられるような揺れです。経験したことのない揺れ方に、何が起きているのかわかりませんでした。恐怖でしかありませんでした。縦揺れの後、連続して経験のない横揺れが襲います。本棚の本は全部飛び出し、色々なものが降ってきたので布団をかぶって頭を守りました。強烈な横揺れは1分ほど続いたみたいですが、とても長く感じました。

この頃は、今のように携帯電話もインターネットもほとんど普及していないので、スピーディーに情報は入ってきません。家を出る前に見たテレビの情報も「大阪、神戸で震度4」と放送されていました。両親と住んでいた実家も物が多数落ちてきた程度で大きな被害はありませんでした。

当時は四条中学校に勤務し、1年生の担任をしていました。学校のことが気になって、急いで学校へ向かいました。（偶然にも当時の学年生徒が今、大東中学校の保護者としていらっしゃいます）出勤途中は余震が続いていて、何回も電柱が大きく揺れていました。怖かったですが、「とにかく学校に行かないと」という思いで、慌てて四条中学校に向かいました。この時点では、まだ被害の状況を詳しく知りませんでした。

担任していた1年2組の生徒たちも全員無事でしたが、学校近くにある団地は高さがある建物のためかなり揺れが激しかったようで、家の中が大変なことになっていると団地に住む多くの生徒が話をしてくれました。学校は、校舎をつなぐ渡り廊下付近に少しひびが入り、図書館の本棚が倒れていましたが、それ以上の大きな被害はありませんで

した。教室に大きな被害もなく、その日はいつものように 6 時間目まで授業がありました。

色々な情報が入ってきたのは 1 時間目が終わったころだったと思います。一番ショックだったのは、「長谷先生、神戸が大変なことになっているぞ。」と当時の校長先生に校長室でテレビを見せられたことです。電車が倒れ、高速道路が倒れ、神戸の街が燃えていました。震災の 1 週間前に訪れていた神戸の街が壊れてしまいました。まるで映画のワンシーンを見ているような、まったく信じられない状況でした。

忘れられない K 君

震災から 2 週間後に、神戸から一人の転入生をクラスに受け入れました。震災直後、大阪府は神戸から避難してきた児童・生徒を、通常の転入手続きなしで受け入れていました。

K 君は、神戸市中央区から避難してきた生徒でした。校区内に祖父の家があるということで、お母さんと妹と 3 人で大阪に避難をしてきました。しっかりあいさつができる生徒でした。K 君は神戸で経験した話をぽつりぽつりと少しずつ教えてくれました。きっと思い出すのもつらかったでしょう。それでも担任の私に少しずつ話をしてくれました。町は壊れ、家族で暮らしていたマンションは倒壊して本当に怖い思いをしたこと、奇跡的に家族全員が助かったけど、避難所がいっぱいで暮らす場所もなく、寒い中壊れた車の中でずっと生活していたこと、着の身着のまま歩いて大阪に避難してきたことなど、私自身が経験したこともないことを彼は 13 歳で受け止め、「生きる」ことに前向きに頑張っていました。勉強どころではなかったはずですが、すぐにクラスになじみ、勉強も頑張っていました。

K 君が四条中に在籍していたのは数週間でした。仮設住宅に住むことが決まると、神戸に戻っていきました。今でも K 君のことをはっきり覚えているのは、彼から「生きる」ことの大切さや、つらくても笑顔で前向きに頑張る勇気を 13 歳の K 君から教えてもらったからです。彼も今年で 44 歳です。どこかで元気にご活躍されていると思いますが、あの日経験したことを毎年この時期に思い出されていることでしょう。

K 君、わずか数週間の担任でしたが、31 年前の四条中学校 1 年 2 組を覚えてくれているでしょうか？機会があればお会いしたいです。

大勢の命が奪われるような災害がいつ起こるかわかりません。阪神・淡路大震災では 6000 人以上の尊い命が失われました。無念だったと思います。

生徒たちには、「生きていることの素晴らしさ」や「命の大切さ」を改めて感じ、今後起こるかもしれない大きな災害に備え、防災意識を高めて欲しいと思っています。

この機会に、震災当日感じたことや経験したこと、命の大切さや防災のことなど、お子様とぜひお話しいただけるとありがたいです。

(使用している写真は神戸市提供です 1995 年 1 月 17 日灘区を撮影)